

秩父 今宮神社
奉賛会だより
(令和六年正月号)



年頭のご挨拶



今宮神社 宮司 塩谷 崇之

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

平素は当神社に格別の御尊神と御篤志を賜りまして誠にありがとうございます。令和六年の「甲辰」（きのえ・たつ）の年頭にあたり、町奉賛会の皆様をはじめ、秩父地域のますますの隆昌と安寧を心よりお祈り申し上げます。

中国の古い思想「陰陽五行説」によれば、「甲」は十千の一番目の文字で、物事の始まりを象徴し、「辰」は万物が成長して動きが盛ん

になる象徴とされています。

辰年は十二支の五番目にあたり、動物では「龍」にあたります。十二支の中で唯一の想像上の動物で、中国では古来より成功や発展の象徴として縁起がよいものとされ、天を守護する瑞獣の長として神聖視され、皇帝のシンボルともされてきました。

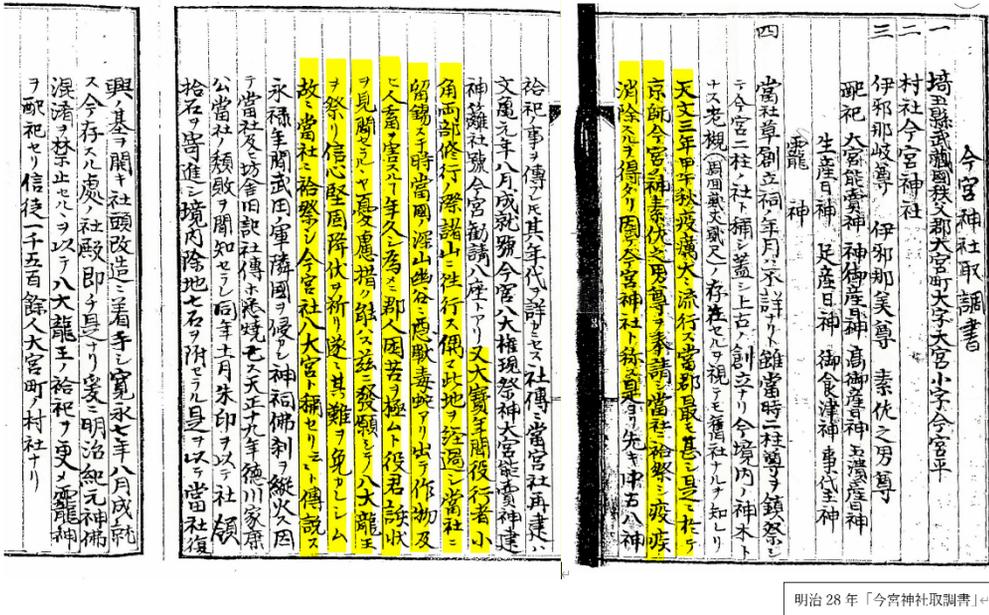
日本では滝を登り得た鯉が「龍」になるといふ伝えから、立身や栄達を意味する「登竜門」の話などがよく知られています。水や海の神として祀られてきた「龍」は、竜巻や雷などの自然現象を起こす大自然の躍動を象徴するものであり、「龍」が現れるとめでたいことが起こると伝えられてきました。

「龍」の姿は「龍に九似あり」といわれるように、角は鹿、頭は駱駝、目は鬼、身体は蛇、腹は蜃（想像上の動物）、鱗は鯉、爪は鷹、掌は虎、耳は牛に似ており、長い鬃をたくわえ、あごの下に一枚だけ逆さに生えた逆鱗（げきりん）があります。「龍」はこの逆鱗に触れられるのが大嫌いで、触れられると激高し、触れたものを即座に殺すとされています。

さて、世界中を襲った新型コロナウイルスもようやく収束に向かい、秩父も落ち着きを取り戻しつつありますが、世界を見渡せば、異常気象による洪水、干ばつ等の災害が多発しており「地球沸騰化」などと指摘されており、物質文明に溺れ、自然への畏れを忘れ、万物の生命を軽視してきたことで、いよいよ龍神様の逆鱗に触れたのではないかとの指摘もなされているところ。幸いにして秩父地域には未だ大きな被害は出ていないものの、龍神様の怒りを鎮めるには、我々人類がいかに振る舞えばよいかを考え、自然への畏怖の念とその恩恵に対する感謝をあらためてよく考える時期に来ているものと思われれます。

当社の龍神様は、古来、武甲山に棲んでいた龍神が、地下の水脈を通じて里に降りてきてこの今宮の地を仮の住処としていたと伝えられています。そして、大宝年間（八世紀初頭）に役行者小角が秩父を訪れた時、悪獣毒蛇に悩まされていた村人たちを救うために、仏法の守護神たる「八大龍王」をこの地に合せ祀ったことで、幾千の龍たちがこれに従い、すべての悪獣毒蛇が降伏して仏法に帰依したと伝えられます。暴れる龍を力で押さえつけるのではなく、仏法により鎮め、龍が善神として里の守り神となったところに、当社の龍神様の優れたご神徳を見ることができました。

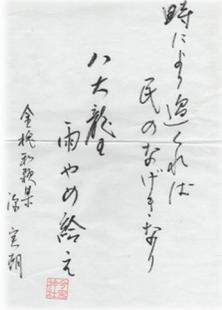
【中学生が金龍の巨大絵馬奉納】
秩父第二中学校の美術部の生徒さんたちから、今年の干支に因んで、迫力ある金龍を描いた立派な巨大絵馬をご奉納いただきました。学校での制作の様子や当日の奉納祭の様子は、去る十二月二十八日夕刻のNHKニュースでも取り上げられ、全国で放映されました。社殿右手の待合室の壁面に展示されていますので、ぜひご鑑賞にいらしてください。



【八大龍王ってどんな神様？】

八大龍王は、天龍八部衆に所属する龍族の八王で、「法華経」に登場し、仏法を守護する龍神として知られます。霊鷲山にて十六羅漢を始め、諸天、諸菩薩と共に、幾千万億の眷属の龍たちとともに釈迦の教えに耳を傾けました。水を司り、水分の神でもあります。釈迦により法華経が説かれたときに王舎城霊鷲山に坐し、観音菩薩普門品第二十五において最上の悟りの境地とされる「阿耨多羅三藐三菩提」に至り、護法の神、観音菩薩の守護神となったといわれています。

わが国では、八大龍王は、古くより、雨乞いの神として信仰を集めてきました。鎌倉期に編纂された「金槐和歌集」には、源実朝による一詩に「雨乞の神は、首があります。大雨を疎んじて八大龍王に「止めてくれ」と頼む趣旨の歌です。



八大龍王神は、八世紀初頭、役行者によって当地に奉斎されたと伝えられています。当社縁起によれば、大宝年間、山岳修行中の役行者がたまたまこの地に立ち寄り、村人から深山幽谷に悪獣毒蛇が出てきて困り果てていると聞き、仏法の守護神である八大龍王を祀って信心堅固に悪獣毒蛇の降服を祈り、ついに難を逃れたことから、以降、この地に八大龍王をお祀りし「大宮山八大龍王宮」または「八大宮」と称するようになったと伝えられています。

明治政府の神仏分離令、修験道廃止令により、仏教色の強い「八大龍王」の奉斎は禁じられましたが、その後「龍神(おかみのかみ)」と呼称を改め信仰を集めてきました。当社では境内の龍神木の樹洞にて祀り、塩谷啓山翁(今宮坊第十九世)の感得した文字でその「お姿」としてあります。

【今年度の行事予定】

◎立春祭 (二月四日)

立春を迎えるにあたり、神職・崇敬者により新年一月五日より三十日間に亘る「寒行」に入り、二月三日(節分)を以って満行を迎え、二月四日の「立春祭」におきまして皆様のご安泰・ご開運をご祈願いたします。

立春祭にあわせて頒布される『立春大吉』の護符は、春の到来を喜び、災厄と招福を願うもの。当社では、数多の神々を産み給うた伊邪那岐(イザナギ)・伊邪那美(イザナミ)の二神のお力をもって春を招き入れます。

◎中町三社祭 (三月二十日)

地元中町会・東町会及び秩父市消防団による火伏(火難除け祈願)のお祭りです。

明治十一年(一八七八年)三月二十一日、中町を火元に発生した「秩父大火」は、秩父(当時は「大宮郷」と呼ばれていました)の市街地約四万坪四百四拾七棟を焼け尽くしました。

二度とこのような災禍の起こらないよう、翌年三月、今宮神社境内摂社に、火伏の霊験ある「秋葉大神」を祀り、以来百四十五年もの永きに亘り、毎年、大火のあったこの日、地元町会や消防団を中心として、火伏の神様(秋葉大神・古峯大神・三峯大神)に防災を祈願するお祭りが斎行されます。

◎龍神祭 (四月四日午前)

当社の霊池に祀られた八大龍王神のご神徳に感謝するお祭です。

龍神祭は明治元年の神仏分離令以来行われませんでした。平成四年(一九九二年)に復活しました。毎年四月四日午前に、龍神様を慕われる多くの氏子・崇敬者らの参列のもと、盛大に祭典が執り行われ、ご神前にて、巫女による舞や奉納演奏などが献上されます。



八大龍王神のご神徳への感謝とともに、世の中の安寧と五穀豊穡、氏子・崇敬者・関係者らの無病息災などを祈念いたします。

◎水分祭 (四月四日午後)

水分(みくまり)神事は、秩父神社でおこなわれる御田植神事に先立ち、秩父神社に龍神池の御神水を授与する神事です。

秩父神社から神官・伶人・作家老・神部らからなる御神幸行列が当社を訪れ「水乞い」を行います。当社の宮司から秩父神社に、当社の龍神の御分霊を『水麻(みずぬき)』(龍神様の御神徳)として授与します。秩父神社は、この水麻を奉斎して秩父神社に持ち帰ります。

秩父神社では授与された水麻を、田の水口をかたどる「藁の龍神」の頭部に奉ります。すると、境内の敷石に龍神様の御神霊が行き渡り、そこは一面の水田と見立てられ、神部らによって「御田植神事」が執り行われます。

◎役尊神祭 (六月九日)

秩父霊場の開祖であり、また今宮坊の開基でもある役小角大神(役行者)の御聖徳を偲ぶお祭り。毎年、役行者の縁日である六月七日に最も近い土曜日または日曜日に、役尊神祠(行者堂)正面にて斎行されます。

明治政府の修験道禁止令以降中断していましたが、御神示により平成七年以降再び斎行されるようになりました。祝詞奏上に続いて「特別護摩供」が執りおこなわれ、導師による護摩と読経の中で参列者による玉串奉奠を行います。神道神事にこのような

神仏習合の形式はいまでは珍しく、貴重な祭祀のひとつです。

◎大被神事 (六月晦日・十二月晦日)

年に二度、六月と十二月の晦日(月の最後の日)におこなわれる神事で、半年間に身についた罪穢を祓うために行う神事です。夏の大被を「夏越の被」、冬の大被を「年越の被」と呼びます。

当社では氏子・崇敬者に予め配布した人形(ひとかた)に罪穢れや災厄を移し、火・水の霊力にて祓い清め、身も心も新たに、明るく正しい生活を続けられるよう祈願します。



◎例大祭 (九月二十八日)

当社本殿に祀られている伊邪那岐大神・伊邪那美大神・須佐之男大神・宮中八神(御巫八神)の御神徳を仰ぎ、その御神恵に感謝するお祭です。毎年九月二十八日に本殿にて斎行されます。

神々への礼拝を通じ、日頃のご加護に対し感謝するとともに、新たな一年の無病息災を祈願いたします。

